

上町遺跡第49次発掘調査現場公開

平成28年11月15・16日



古代の竪穴住居跡を発見！

今回の発掘調査では、古代の竪穴住居を4軒確認しました。調査範囲が狭いため、道路や地面の下に続いているものばかりで全体の形状が分かるものではありません。しかし、確認した範囲からは約4メートル四方の四角形で、住居の隅にはカマドが作られていることが分かりました。カマドは煮たり焼いたり、料理を作るための施設です。石と粘土で作られ、焼けた土や灰、炭などが見つかります。

住居からは、当時の人々が使ったと考えられる須恵器などが見つかりました。その年代から、住居は奈良時代から平安時代にかけて造られたものと考えられ、約1,200年ほど前のものと考えられます。

竪穴住居の想像復元図



<上町遺跡49次発掘調査のまとめ>

調査原因 社会資本整備事業総合交付金事業 市道上町線道路拡幅工事 **調査面積** 30㎡

成果 奈良時代、飛騨の人々は税として都で建築業務に従事していました。都の出先機関である郡庁も上町付近に設置されていたと考えられています。しかし、奈良時代末や平安時代になると、大変厳し都での労働から逃げ出す人もいたようです。今回見つかった竪穴住居は丁度そのころのもので、上町遺跡でも郡庁施設に集まっていた人々が分散していきます。今回見つかった住居の主人も、そうした人達の一人だったのかもしれませんが。

竪穴住居跡 地面を掘りくぼめた後に柱を建てて木を組み、そこにカヤなどを葺いていたと考えられています。縄文時代以降、主に住居として建てられていました。

カマド 古墳時代の5世紀ごろに朝鮮半島から伝わり、日本中に広まりました。ガスコンロが農村にまで普及する昭和30年代まで、どの家にもカマドはありました。カマドは1,500年間も日本人の生活とかかわってきたのです。

須恵器 灰色をした硬い焼き物です。古墳時代の5世紀ごろに朝鮮半島から窯で焼成する技術が伝わり、日本中に広まりました。飛騨では6世紀ごろから作られるようになります。飛騨市内では古川町信包などで窯跡が見つかっています。